

GF 通信

ジェンダーフォーラム

GENDER FORUM PRESS

女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学

ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

FROM GENDER FREE SPACE

2013年度、ジェンダー・フリースペースの活動は新展開を迎えます。

ジェンダー・フリースペースの新たな取り組みとこれから

～ふたつの部屋から紡ぎだされる共同体～

GF通信を手にとってくださったあなたへ

「はじめまして」の方も「こんにちは」の方も、この度はGF通信を手にとってくださりありがとうございます。ジェンダー・フリースペースでは、昨年度から新しい取り組みを始めています。それは、「学生にとって開かれた空間づくり」を意識したいくつかの企画の実施です。

その企画の実施には『和みの部屋』というご近所のお部屋との繋がりがきっかけとなりました。そのためこの文章は、和みの部屋スタッフとの合同執筆という形となっていますので、更にお楽しみいただけるかと思えます。

GFSスタッフの悩み

ジェンダー・フォーラムの活動拠点である、ジェンダー・フリースペース（以下GFS）には、ちょっとした悩みがあります。それは、10数年にわたる活動実績がありながら、学内での認知度がいまひとつなことです。「ジェンダー（フリースペース）ってどこにあるんですか～」と聞いてくる学生も結構多くて、ちょっと寂しくなってしまうたりします。それは、G棟という学内の隅っこの校舎にあるからかもしれませんし、活動内容の充実度が足りないからだというご意見もあるかもしれません。しかしこのままで良い筈はなく、学内でのサポーターを増やしてこそ、さらなる活動の充実が図れるのではないかと……。そして私たちが伝えたいと考えている「人としての尊厳」や「人に優しく生活しやすい社会」は、学内の学生サポーターが、卒業して社会人となり、当事者として実現してくれるのではないだろうか。そんなふうに思う日が続いていました。

和みの部屋との合同企画

GFSの斜向かいに『和みの部屋』という、学生のため

のフリースペースがあります。和みの部屋については後ほど説明しますが、私たちは若干の立ち位置こそ違えども、共通の目的や視点を持っています。それは、「ひとりひとりの感じ方や立場を大事にして考えていきたい」という思いや、「より多くの学生に利用してほしい」という強い願いです。そこで多くの共通点を持つ、ふたつの部屋が協力することになりました。

ふたつのフリースペースの小さな活動

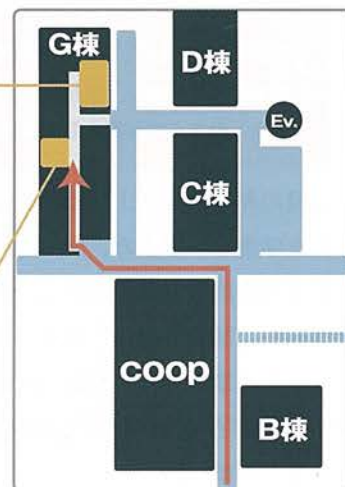
ジェンダーフォーラムでは、年内に何度かの講演会や勉強会を行っていますが、学生にとって授業と同様に硬いイメージがあるようです。ジェンダーフォーラムと学生たちの間には、少し距離があるというのが正直なところでしょうか。では、もっと気軽に部屋へ足を運んでもらうにはどうしたら良いのか……。ちょっと柔らかすぎるかもしれませんが、GFSでは和みの部屋との合同企画としてお茶会を実施しました。また、学祭ではGFSにて学生と協働し、



▲ジェンダー・フリースペース
(火～金、12:00～17:00 開室)



▲和みの部屋
(火～金、12:00～16:30 開室)



『トン汁屋』を出しました。学生たちと一緒においしいものを食べながら、雑談をすることで、まずは、どんなスペースなのか、ここには何があるのかを知って欲しかったのです。

和みの部屋って……？

2012年度からおしゃれにリニューアルオープンされたG棟1階「和みの部屋」は、“ほっと一息つける空間”を大切に、学生や教職員が誰でも利用できる部屋です。

ご飯をゆっくり食べたいとき、一人でボーっとしたいとき、ちょっと学校生活で困ったことを相談したいときなど、利用の仕方は様々です。また、この部屋はスタッフ（現院生や卒業生）と教職員の協同で運営しています。更に、今回合同企画（そして合同執筆）をさせていただいたGFSとも親睦を深め、互いの運営を支えています。

和光の暖かさや面白さを知っていただく大切な機会にもなると思いますので、ぜひ一度いらしてください。

トン汁・ホットケーキ・白玉

2012年度後期では、主に3つの企画を行いました。その内の『ほっと一息会。』と『楽しんで白玉の会。』は和みの部屋との合同企画として実施しました。目的は次の3点です。

- ①GFSと和みの部屋を利用する学生が両方の部屋の実在を知ること。
- ②全学生に2つの部屋の実在を知ってもらうこと。
- ③学生同士の交流がその後の学校生活へのより良い効果をもたらす種となること。

以上の目的を基に、10月と11月に1回ずつイベントを企画しました。内容は次の通りです。

第1回「ほっと一息会。」 2012.10.16 実施

ホットケーキをGFSで作り、温かい飲み物を和みの部屋で受け取り、どちらの部屋も行き来できるお茶会。

第2回「楽しんでしらたまの会。」 2012.11.20 実施

白玉をGFSで作り、温かい飲み物を和みの部屋で受け取り、どちらの部屋も自由に行き来できるお茶会。

普段の利用者数を上回る学生が訪れ、中には初めて来てくれた学生もいました。イベント中、初対面の学生同士での自然発生的な会話や、日頃あまり自分から話さない学生が積極的に話している姿も見られました。また、普段どちらか一方の部屋だけを利用してくれている学生がもう一方の部屋の実在を知って、企画後も部屋を利用するようになってくれました。

更に、2012年11月に行われた学祭では、GFSにて「トン

汁屋」を実施し、部屋に足を運んでくれた学生さんや先生方に愛情込めて作ったトン汁を振舞い、語りました。



▲ホットケーキ、いただきます！

▲10種類以上のお茶を持ち寄りました。

学生の声（添田晃介・心理教育学科4年）

私は、大学4年の秋まで、GFSの事をよく知りませんでした。たまたま和みの部屋スタッフとの会話の中で、GFSにお邪魔したのをきっかけに、卒業論文の作業や雑談をしに、たびたび遊びに行くようになりました。

遊びに行く前は、GFSという場所に対して、「入室したら強制的にジェンダーの勉強をさせられる」とか「男性を敵視している方々の集い」といったイメージがありましたが、GFSスタッフの阿野さんとお話をして、そのイメージは払拭されました。

阿野さんとの会話の中で、私の家族関係の中で共感できるポイントが多々あり、ジェンダーというものに対してのイメージが変わり、「身近にあるものなんだなぁ」と考えるようになりました。

GFSは、お茶を飲みながら、雑談に花を咲かせる穏やかな場所ですので、男性でも女性でも、休憩がてら気軽に出入りできる場所であることが伝われば良いな、と私は思います。

合同企画からその後

GFSの雰囲気が少しずつ変わってきたと感じています。これまで見かけたことがなかった学生が、お茶を飲みに来がてら、「ジェンダーってなんですか」なんてスタッフと話し出しながら、いつの間にか腰かけて書架の本を手にとっているという様子が見られます。また男子学生が集まって、手芸を始めたこともあり、「ずっと毛糸でなにか作ってみたかったけど、（手芸は普通女性がやるものだから）家ではできないんだ……」と言っています。こうした、日常の趣味の世界にもジェンダーが入り込んでいることを思い知るところですが、GFSが、こうした規範の窮屈さを払拭するきっかけになればと思っています。

和みの部屋との合同企画は、今年度も継続していきます。この小さな活動により、ふたつの部屋と学生たちの間柄がどう変化したかは、今後もここで報告したいと思います。

（GFSスタッフ 阿野理香・宮嶋隆輔）

（和みの部屋スタッフ 小澤笑子）

デートDV防止啓発講座

町田市男女平等推進センターとの共催で、デートDV防止啓発講座を行いました。

町田市男女平等推進センターによる「デートDV防止啓発講座」が、2012年11月15日（木・4限）に和光大学で行われました。ジェンダーフォーラムも開催準備や学内PRのお手伝いをし、徳永貴志先生の「法と人権」の受講者を中心に140人もの参加がありました。

講師は深沢泰子さん（アウェア認定ファシリテーター）。「これってデートDV？～あなたは、恋人からこんなことをされていますか？」

と題し、恋愛のなかになんた暴力があるのか、お互いを尊重しあう関係を作るにはどうしたらよいのかなどについて、わかりやすくお話ししてくださいました。



▲学生に語りかける講師の深沢泰子さん

講座に寄せられたコメントには、「そういえば……」と自分の体験をとらえなおすものが多く、「身体的暴力以外にも言葉による暴力や精神的な暴力がある」「自分とは無関係だと思っていたことが身近にある」という気づきが真剣に書かれていました。以下で、そのいくつかを紹介し（個人が特定されないように少し手を加えています）。

【これって暴力……？】

「彼の機嫌を損ねてはいけない、と思っていませんか？」というところが自分があてはまり、驚きました。元彼は、私が男の子と仲良く話をしていたり、遊んでいたりと、言葉では何も言わず、物にあたって「機嫌が悪い」というアピールをしていました。学校でも、友達とも口をきかず、舌打ちしたり、大きなため息をついたり、物にあたったりとたいへんでした。だから、極力怒らせないように気をつけていました。彼に「怒ってる？」とか「何かした？」と聞いても、いつも「何でもない」と言われていました。これもDVだったのでしょうか？（女性）

私は、相手（つき合っている人）が自分の知らない人や嫌いな人と遊んでいるのが嫌で、そういったことがわかったら、相手にメールや電話で冷たくあたってしまいます。毎日連絡しないと安心しない、不安でいま相手が何をしているのか気になって、相手から連絡が来ないと「何で？」と不快感をもってしまいます。そういったことを思い出して、今回の講義を受けて、相手のことを理解しよう、もっと心に余裕をもとうと改めて思いました。（女性）

【性別役割に埋め込まれた暴力】

デートDVで怖いのは、加害者が自分 は加害者だと気づきにくいことだと思う。映画館で、いつも自分の観たいものを押しつける男性のケースが例に挙げられていたが、男性のほうはもしかしたら、リーダーシップがあったほうがモテると思っているのかもしれない。あるいは、女性のほうから男性に、自分の観たい映画を積極的に主張すると男性に嫌われると考えて、何も言えないのかもしれない。恥ずかしがらずに相手はどう思っているのか、聴いてみるのも大切だと思う。（男性）

今回の話では、女性が男性に考えを押しつけられるDVが主だったが、デートでは逆に、男性が女性の行動にふりまわされることも多い気がする。たとえば、化粧品や衣料品店の前で長時間待たされたり、試着した衣服の感想をしつこく尋ねられたり、お金を出すことを強要されたり。ほとんどの男性は別にそんなこと気にしていないと思うけれど、中には本当にストレスに感じている人もいるのではないかな。（男性）

【友だちから相談を受けたら】

私は高校生のときに、友だちに、恋人から暴力を振るわれていることを相談され、「ありえない。別れたほうがいい」と言いました。「でも彼のことが好きだし、暴力を振るわれるのは私のことを想ってくれているからかもしれない」と言われ、そのときは「言っている意味がわからない」と思いましたが、今日話を聞いて「好きだから暴力を振るう」と思い込んでしまう例はけっこうあるんだなと思いました。DVを受けている被害者は、そのように考えずに、まずは自分のことを大事にしてほしいと思います。それから、過去に相談にのったときは、ただ話を聴いてアドバイスすることしかできなかったのが、今度そういう相談を受けたら、専門の機関に相談することをすすめてもらって、一刻も早く解決できるように行動したいと思いました。（女性）

困ったことがあったら、学内では、学生相談室やハラスメント相談員などが力になります。町田市も「女性悩みごと電話相談」（042-721-4842）を実施しています。東京ウィメンズプラザには「男性のための悩み相談」の窓口があります（問い合わせ03-3400-5313）。緊急のときは、最寄りの警察署の生活安全課に駆け込みましょう。個人情報を守られますので、少しだけ勇気を出して相談してみてください。（杉浦郁子・現代社会学科）

ジェンダーの視点からの 卒業論文発表会

ジェンダー関連の卒論を集め、発表会を行いました。

2012年度の卒業論文で“ジェンダー”を考えた学生たちが集い、成果発表会を行いました。発表者7名、参加学生6名、教員3名（竹信三恵子・浅井幸子・杉浦郁子）と井上輝子先生、総勢17名で有意義な議論がなされました。

発表した4年生、参加した3年生以下の学生のほとんどは、ジェンダー・スタディーズ・プログラムに登録し、関連科目を体系的に履修しています。そのためか、卒業論文も質疑応答も、中身の濃いものとなりました。

発表者と卒業論文のタイトルは、以下の通りです（報告順）。論文は、ジェンダー・フリースペースに所蔵されていますので、全文を読みたい方はぜひお立ち寄りください。

（杉浦郁子・現代社会学科）

1月16日（水）14:40 - 17:50

於・和光大学G棟1階 ジェンダー・フリースペース

- ・村上奈央『トランスジェンダー当事者の家族へのカミングアウトと親子関係の変容』（現代社会学科）
- ・竹内郁江『ひとり親家庭が養育費不履行を解決する方法～養育費制度の弱さに取り残された母子世帯～』（現代社会学科）
- ・阪尾由香里『ドメスティック・バイオレンスの現状と被害者支援における今後の課題』（現代社会学科）
- ・山本吾郎『男性同性愛者における将来展望の特徴～3名のライフヒストリーの分析から～』（心理教育学科）
- ・須賀由佳『介護退職をどう防ぐのか～高齢化と労働力不足のはざまで～』（現代社会学科）
- ・中島雅登『徴兵制を「男性への人権侵害」と位置付ける試み～現代韓国の事例を中心に～』（心理教育学科）
- ・稲邊倫史『男性同性愛者におけるカミングアウトと受容のプロセスモデル』（心理教育学科）

FROM GENDER FREE SPACE

<ジェンダー・スタディーズ・プログラム> 履修のすすめ

ジェンダーにまつわる履修プログラムをご紹介します。

○ジェンダー・スタディーズ・プログラムとは

性別によってライフコースや生活経験が異なる社会の問題性を理解し、よりよい社会について考え、実践する力を養うことをめざしたプログラムです。「ジェンダー関連科

目」を系統的に履修し、レポートを提出した学生に、和光大学が「プログラム履修証明書」を発行します（翌年度5月頃、卒業年次生は卒業時）。プログラムの申請とレポートの提出先は学術振興係（A棟1階）です。毎年4月に申請を受け付けます。何年生からでも申請することができます。希望者は4月に開催される履修説明会に参加してください。

○プログラムの修了要件

- 1 コア科目の履修（12単位以上）。各学部学科の科目からジェンダー関連科目がコア科目に指定されています。詳しくは「学修の手引き」またはジェンダー・スタディーズ・プログラムのリーフレットを参照してください。
- 2 関連科目の履修（8単位以上）。ジェンダーにかかわると本人が判断する科目です。コア科目の履修が12単位を超えた場合、超えた分を関連科目として加算できます。
- 3 レポートⅠの提出。ジェンダー関連施設（公的機関やNGO等）におけるインターンシップの報告、ジェンダー関連イベントへの参加記録、ジェンダーに関する卒業論文（またはその要約）などをあてることができます。
- 4 レポートⅡの提出。①ジェンダー関連科目の履修を通して学んだこと、考えたこと、②それらを通して全体として学んだこと、考えたことを書いてください。

レポートⅠ、Ⅱともに2000字程度を目安としていますが、それより長くてもかまいません。

みなさんのプログラム申請をお待ちしています。



GF EVENT

映画『隣人』上映会開催によせて

映画『隣人』の上映会が開催されました。

2012年10月24日（水）3限に、心理教育学科の主催で映画『隣人』の上映会が開催されました。プロゼミの授業として企画されたものですが、学内の希望者にも開かれており、船橋先生が「女性学」の授業で紹介されていた経緯から、ジェンダー・フォーラムが宣伝協力しました。

児童養護施設の日常を追ったドキュメンタリー映画は、学生にとって、解説がないことによる理解の難しさはあったものの、強く印象に残ったようです。

学生の感想を一つ紹介します。

○最も印象に残ったのは、保育士さんが退所する場面です。女の子が泣きじゃくり、去ろうとする保育士さんにしがみついて引き留めるシーンは、誰もが目に焼き付いたと思います。女の子が尋常ではない様子で保育士さんに抱きついて離れない姿は痛ましくもありました。私は初め、保育士さんたちはあくまで母親的役割であり、本当の母親にはなれないと思っていました。しかしこのシーンを見て、あの女の子にとってあの保育士さんは紛れもなく母親なんだと確信して、その衝撃が印象に残りました。(Kさん)

FILM REVIEW

映画批評:「隣る人」

児童養護施設を舞台にしたドキュメンタリー映画だが児童養護施設の問題や現状といったものを描いた映画ではない。様々な事情で、親と一緒に暮らせない子どもたちが「親代わり」の保育士と寝食をともにしながら生活している。テロップも背後の音楽もない。玉ねぎを刻む音で始まる映画は、最後まで平凡だけど大切な日々の暮らしを、豊かな人との関係性を描き出している。

題名の「隣る人」とは、なんでもない時間を共有し、愛情をもって自分の存在を受けとめてくれる人のことだと、この映画は教えてくれた。

「どんなムっちゃんも大好き。ずっと一緒にいようね。」ムっちゃん10歳のお誕生日。ともに暮らす人たち全員でお祝いの会の席で、ずーと寄りそってきたママである、保育士マリコさんの眼に涙が光る。チョット照れて、はにかみながらもムっちゃんの表情がキラリと輝く。カメラは、その一瞬を見逃さない。8年間をかけて、子どもと「くらし」とともにしつつ、撮り続けた丁寧な作品だからこそ、ありのままの子どもと保育士さんの関係が見るものの心に届く。

「マリコさん大好き」と表現するムっちゃんにとって大切なのは、ただ、ひたすら寄り添い、かけがえのない存在としてムっちゃんを、抱きしめるマリコさんの存在なのだ。それは、親と離れて暮らす「かわいそうな子ども」への同情やパターナリスティックな上からの目線ではない。

それにしても、何という、やさしさ、温かさにあふれた空間なのだろう。血のつながりがなくても、相手の気持ちを大切に思うことで、こんなに素敵な人とかかわり合いができるという事実に感動した。

一方、両親が揃い、何不自由なく暮らしている「フツウ」の家庭において、マリコさんのように、子どもの気持ちを尊重し、子どもに寄り添っているお母さんは、どれほどいるだろうか、ということが気になった。実際、私もマ

成人し親となった3人の我が子を、こんな風に抱きしめてこなかった、こんな風に「大好きだよ」というメッセージを届けてはこなかった、という悔いの思いがよぎった。

子どもは、こんなにも強く、深く愛情を求める存在なのだ、ということを再認識させられた。いや、子どもだけではなく、人は、だれもが「隣る人」を求めているのだ。

今からでも遅くない。人とかかわり合いのなかで共感し、理解することを大切にしていきたい。東中野のポレポレ座で昨夏、ロングランの興行後、アンコール上映さらに自主上映運動の続く本作品は、子どもとは、家族とは、くらしとは、愛情とはなにか等、多くの問題を観る者に提起しながら、今もなお全国各地を回っている。(船橋邦子・本学非常勤講師)

GF WORKSHOP

“語り、演じる”プレイバックシアター 「劇団プレイバックーズ」を招き、WSを開催しました。

10月27日(土曜3-4限)、ジェンダーフォーラムと共通教養科目「性とジェンダーB」が共催し、「劇団プレイバックーズ」の皆さんをお招きしました。

「劇団プレイバックーズ」(<http://www.playback-az.com/>)は、「プレイバックシアター」を上演する劇団です。プレイバックシアターとは「台本なしの即興劇」、参加者(観客)の体験を舞台劇として再現する(プレイバックする)演劇です。「性とジェンダーB」では、参加者に「ジェンダーをめぐる経験」を話してもらい、プレイバックしていただきました。

「ジェンダーをめぐる経験を話してほしい」といきなり言われたら、多くの人は戸惑いを覚えると思います。まして授業で、それほど親しくない人たちの前で自分の体験を話せと言われたら、「きびしいなあ」と思うのではないのでしょうか。私自身、社会調査では人の話を聞いてばかり、自分の話をすることには慣れていません。最近では、日々の出来事はどんどん忘れていくし、かといって、覚えていることは人前で披露するには深刻すぎる……。そう思うと、授業で体験を話してくれる学生がいるのだろうか、という不安が先立ちました。

劇団プレイバックーズの皆さんは、そうしたことを前提にワークショップを進めて下さいました。まず1コマ目は、「自分について話す」ウォーミングアップに当てられました。ランダムにペアを組みながら、「これまでに『女/男のくせに〇〇だ』と言われたこと」「『自分って女/男なのに××だよなあ』とってしまったこと」「自分が明日1日、別の性別になれるとしたらどんな1日を過ごすか」などのトピックについて1分ずつ、お互いに話をし合いました。

ちなみに私は「女のくせにがさつだ」と母親に言われていたことを思い出し、「女なのに子どもを産まなかったなあ」と思い、「明日、男になったら筋トレしてガチムチ筋肉をつけたい」と思いました。どれも「女らしさ／男らしさ」とらわれた発想で、自分で苦笑してしまいましたが、こうして少しずつ昔のことを思い出し、自分について話すことに慣れていきました。また、互いの話に共感しあうことを通して、場の一体感が醸成されていきました。

次の、誰かの体験を「語り直す」、自分の体験を誰かに「語り直してもらう」という実践にも再発見がありました。私は、25年前の高校時代、学校祭や体育祭で、衣装作りの仕事が当たり前で女子に回ってきたこと、夜なべして苦手なミシンを踏んだことなどを話したのですが、その出来事を語り直してもらったとき、体験には「気持ち」がともなっているのだということを改めて確認しました。私が語れたのは、起きた「出来事」だけだったのですが、「語り直し」では、私が体験したであろう「気持ち」が雄弁に表現されていました。そして、誰かに「気持ち」をわかってもらうことは、とても「気持ちいい」体験でした。

2コマ目は、劇団員の皆さんによる即興劇です。学生からテラー（自分の体験を語る人）を募り、コンダクター（司会）がテラーから体験や記憶を聞き出し、その場ににいる人に紹介します。テラーが話し終わると、アクター（劇を演じる役者たち）が、ストーリーを瞬時に劇にします。



▲即興で演じる

結局、全部で6名の学生が自分の体験を語ってくれ、「誰も手を挙げないかも」というのは取り越し苦労でした。劇団員の皆さんは、何の打ち合わせもなく、即座にすばらしい劇を作りあげのですが、ここでも「感情が的確に表現されている」ということが強く印象に残っています。このように感じるのは、ふだん「自分の感情」に無頓着であるからかもしれません。日常の何気ないひとコマにも複雑な感情が付随していること、そうした気持ちが置き去りにされがちなこと、それを拾い上げてもらうことがヒーリングになること、などを実感しました。

5限目には、ステージの終わった劇団員の皆さん（代表の宗像佳代さん、メンバーの秋山耕太郎さん、小森亜紀さん、丹下一さん）をジェンダー・フリースペースへお迎えし、学生たちと懇談会をしました。劇団員の皆さんからは、テラーになったことによるその後の生活・人生への影響につ

興味深い話をおうかがいしました。

劇団プレイバックーズの皆さん、長時間おつき合いくださり、本当にありがとうございました。（杉浦郁子・現代社会学科）



▲ジェンダー・フリー・スペースで懇談

FROM GENDER FREE SPACE

フェミニスト経済学会、 7月6日に開催へ

各地のフェミニズムと経済に関心を持つ研究者たちが「不況とジェンダー」をテーマに意見交換します。

フェミニズムの視点からの経済分析を目指す「フェミニスト経済学会」の研究大会が、7月6日、和光大学で開催されます。論題は、女性と貧困。本学の杉浦郁子先生が、セクシュアルマイノリティの貧困問題について報告され、竹信がコメンテーターを務めます。

フェミニスト経済って何のこと？ 経済に男性、女性があるの？ と疑問に思う人もいるかもしれませんが、実は、これまでの経済学は、家庭の外で働く男性を基準にお金の流れについて論じることが多く、家庭の中でお金をもらわずに行う家事や介護などの労働が、どのように経済と関係してくるのか、女性のパートなどの低賃金労働が、経済をどのように支えてきたのか、といった点からの分析が主流になることは少なかったのです。

でも、グローバル化で男性の雇用が不安定化する中で、女性も自力でお金を稼ぐことが問われるようになり、労働や消費を通じた女性の経済への参加の意味が、注目されるようになっています。これを「ウーマノミクス」「ウーマンエコノミー」と呼んで、新しい経済発展のカギと考える意見も高まっています。

今回の論題、「女性と貧困」も、男性に稼いでもらえば女性の生活は安定する、といった従来の考え方が、大きく揺らぎ、女性の経済的自立をそぐような社会条件が、家計収入を減らし、男性の負担を増やし、新しい貧困の原因となるような事態を背景に、女性に視点をあてた貧困問題を多角的に論じていくことが目的です。

関心のある方はぜひ参加していただきたいですし、大学を卒業したあとの生活設計のために、男女ともに、こうした視点から経済を見る力をつけていただきたいと思います。

（竹信三恵子・現代社会学科）

2012年発行の20号で、坂本文庫の寄贈者、坂本喜久子さんの肩書が「東京都国際交流委員会」とありましたのは間違いでした。訂正しておわびします。